「星天に君を置いて」

日付 2024/05/24
第2稿

作者名：ぬぬぬぬぺ

「脚本のタイトル」・登場人物表

山本奈々雄（18）	高校三年生。	母子家庭二人兄弟の長男。
武藤陸樹　（18）	高校三年生。	奈々雄の友達。
佐々木裕也（18）	高校三年生。	陸樹の友達。
箭内里玖　（18）	高校三年生。	陸樹の友達。
山本統吾　（12）	小学六年生。	奈々雄の弟。
山本香織　（43）	パート働き。	奈々雄と統吾の母親。
島田一　　（38）	高校の先生。	奈々雄と陸樹の担任。
クラスメイト1～4	高校生時代の同級生。	
クラスメイトA～D	小学校時代の同級生。	
ニュースキャスタ		
喫茶店の店員		
スイカ直売所の店員		

「星天に君を置いて」あらすじ

山本奈々雄（18）は、母子家庭で母親は弟に付きっきり。自分の身に起きること程度は自身で済ませて母親に負担がかからないように日々を過ごす。しかし、そんな日々もいつしか周りからは「可哀そう」「気持ち悪い」と言われ、距離を置かれるようになった。高校三年生のクラス替えで武藤陸樹（18）を見かける。成績優秀で、周囲には彼を尊敬のまなざしで見るクラスメイトや友人、期待を込めて応援をする担任の先生。教室の端でさえ彼の光は届いていた。いつものように校舎の屋上で総菜パンを食べているとガシャンと音がする。音がする方を覗くと彼は飛び降りようと柵を乗り越えていた。ふと声に出た本音は彼への嫉妬を含んでいた。

「死ぬ前に教えてくれよ、君のこと」

1.　手稲山・午後8時・外

男、フィルムカメラを片手に夜空を眺める。地べたに座り、カシャカシャとカメラを鳴らす。

男が立ち上がろうと腰を上げると、数枚のフィルムがポケットから落ちる。

写真には、スイカやコーヒーなど様々な季節の風景が映っている。

男――武藤陸樹（19）。

陸樹　「さみぃ……」

空には天の川が広がっている。

2.　山本家　・午前6時・内

リビングのテレビ、朝のニュースが流れている。

ニュースキャスタ　「今日の天気です。北海道全域、日中は晴れる予想です。夕方以降は所により雨が降る予報です。傘を持ってお出掛けした方が良いですね。」

山本香織（43）、キッチンで弁当を作る。

香織　「奈々ぁ、お弁当いる？」

山本奈々雄（18）、自室から反応をする。

奈々雄　「要らないよ、忙しいでしょ」

香織　「ほんとにごめんね、ほら！　統吾、急がないと学校遅刻しちゃうよ。お弁当入れて」

山本統吾（12）、香織に背中を押されながらリュックを背負い家から出る。

机の上には五百円玉が一つ置かれている。

奈々雄　「（ボソっ）　羨ましいな」

リュックを背負い、かかとの潰れたスニーカーを履いて家を出る。

3.　街中の十字路　横断歩道・午前7時・外

街中は、通勤ラッシュの学生やサラリーマンで賑やかになる。

母親　「今日は誕生日だから朝ごはんから好きなモノ食べちゃお～」

娘　「お～」

買い物帰りの親子、奈々雄の横通り過ぎる。

チカッチカッと信号が点滅を始める。

武藤陸樹（18）、奈々雄の後ろから走り過ぎる。

陸樹　「これ渡った方が遅刻しないよ」

里玖　「あっちゃん、足早すぎるって」

陸樹、横断歩道に入る。

ビービーと左折のトラックが信号に差し掛かる。

裕也　「陸樹、トラック来てる！」

奈々雄、陸樹の腕を引っ張り、二人とも尻もちをつく。

陸樹　「危なかったぁ。まじで」

箭内里玖（18）と佐々木裕也（18）、陸樹を起こす。

里玖　「あっちゃん、大丈夫だった？」

陸樹　「あの人のおかげで。多分同じ学校なんだけど」

裕也　「ほら陸樹、早く行かないと遅刻するって」

スマホで時間を確認しながら話しかける。

三人は、急いで学校へ向かっていく。

奈々雄　「擦りむいたかな」

奈々雄、ゆっくりと立ち上がる。

4.　高等学校　教室・午前9時・内

教室は太陽に照らされ、暖かな空気に包まれている。

島田一（38）、教室に入り、ホームルームを始める。

島田　「今日から新学期です。きっとみんなもクラス替えで不安もあると思います。とりあえず、出席番号順に自己紹介してください。」

クラスメイトが次々と自己紹介していく。

クラスメイト1　「三野結衣です。好きなことは家族と海外旅行に行くことです……」

クラス全員　「おぉ～」

奈々雄　「（ボソっ）いいなぁ」

島田　「はい、次は武藤。」

陸樹　「はい！どうも武藤陸樹って言います。漢字で書くとこうやって書きます。よく『あっちゃん』って呼ばれるのでみんなもそう呼んでくれると嬉しいです。」

クラスメイト2　「あっちゃ～ん」

クラスメイト3　「ぜってぇモテてる」

クラスメイト4　「実際、イケてるからなぁ」

クラスメイト、口々に陸樹のことを話す。

奈々雄　「（ボソっ）いいなぁ」

「過去回想」　×　×　×

奈々雄（N）　「小学校の頃、自己紹介で僕の世界が決まった。」

一クラス十五人程度の小さな教室。

クラスメイトA　「僕が好きなことはお父さんとお母さんとお兄ちゃんと一緒に遊びに行くことです。」

クラスメイトB　「どこいくの」

クラスメイトA　「遊園地です！」

クラス全員、拍手する。

先生A　「次は村上汐梨ちゃん！」

クラスメイトD　「はい！私は村上汐梨です。好きなことはお父さんとお母さんと一緒におばあちゃんの家に行ってみんなでご飯を食べることです」

クラスメイトA　「ご飯食べるの好きなの？」

クラスメイトD　「お母さんとお父さんとおばあちゃんと一緒にご飯を食べることが好きだからです」

クラスメイトB　「つまんなーい」

奈々雄　「いいなぁ」

クラスメイトD　「いいでしょ」

先生A　「汐梨ちゃんありがとう。はい、次は山本奈々雄くん！」

奈々雄　「はい！ 僕は山本奈々雄です。好きなことは弟と一緒に遊ぶことです。」

クラスメイトB　「つまんなーい」

クラスメイトC　「どこで遊んでるの」

奈々雄　「家と公園です」

先生A　クラスメイト、クスクスと笑う。

奈々雄（N）　「奈々雄くんありがとう。かっこいいお兄ちゃんにみんな拍手！」

拍手がまばらに起きる。

「家族との思い出、旅行の記憶。特別な趣味がなかった僕は少し悲しかった、悔しかった」

「終了」　×　×　×

島田　「はい最後は山本。おい、起きてるか」

隣の席の陸樹、奈々雄の肩を叩く。

陸樹　「（小声で）腹痛い？ それとも頭痛い？ もしかして自己紹介嫌だった？」

陸樹、奈々雄の腕を引っ張って立ち上がらせる。

陸樹　「奈々雄くんが体調崩しているので保健室連れていきます」

島田　「分かった。帰ってきたら自己紹介よろしく」

陸樹と奈々雄、教室から出る。

5.　高等学校　廊下・午前10時・内

奈々雄、階段に座る。

奈々雄　「ありがとう」

陸樹　「いいよ、俺も自己紹介嫌いだったからさ、なんとなくわかるんだよね」

陸樹、階段を昇り降りする。

奈々雄　「そんな風に見えないよ」

陸樹　「でしょ？　ところでさっき泣いていたけど、本当にお腹とか痛かったりする？」

奈々雄　「大丈夫、ありがとう」

陸樹　「そんな言われることないよ」

キーンコーンカーンコーン　チャイムがホームルームの終わりを知らせる。

6.　（）高等学校

陸樹やクラスメイトが仲良く授業を受けて、屋上で昼食をとる風景や体育館で楽しそうに昼休みを謳歌している風景を奈々雄は羨ましそうに一人で教室の隅で座っている。

7.　高等学校　屋上・午後０時・外

キーンコーンカーンコーン　四限の終わりのチャイムが鳴る。

奈々雄、一人で屋上からの景色を眺めながらパンを食べる。

ガシャンガシャンと柵が軋む音が響く。

遠くからラインの着信音が引っ切り無しに鳴る。

奈々雄　「何やっているんだよ」

陸樹　「ちょっと柵の外に箸落としてさ、それで」

奈々雄　「そんなわけないだろ。なんで陸樹がそっちなんだよ」

陸樹　「いや、冗談だって。最近の奈々雄、暗かっただろ」

陸樹、アハハと笑う。

奈々雄　「ブラックジョークが過ぎるだろ。なんかあったら友達に相談したらいい」

陸樹、柵にかけた手へギュッと力をこめる。

陸樹、奈々雄に掴みかかる。

陸樹　「お前はいいよな。いっつも一人で、誰にもなんにも文句も言われない、変な期待もお願いもされない。そんな立場で俺にもの言ってんじゃねえよ」

陸樹の後ろには多くの学生が遊ぶグラウンドが広がる。

奈々雄の後ろには誰も居ない屋上ばかりが見える。

奈々雄、下を向いたまま拳を固くする。

陸樹、柵に手をかけて再度飛び降りようとする。

陸樹　「はぁ……スッキリした。最後がお前で良かったよ。ありがとな」

奈々雄　「死ぬ前に教えてくれよ、陸樹のこと」

奈々雄、柵から身を乗り出して陸樹の手を握る。

陸樹　「もういいだろ、おまえには俺の問題は解決できないし、して欲しいとも思ってない」

奈々雄　「陸樹のためなんかじゃない、俺はお前みたいになりたい。許されるならお前になりたい」

陸樹　「いいよ。その代わり俺が死ぬときは手伝ってくれよ」

奈々雄　「どうして」

陸樹　「……」

奈々雄　「……」

空は段々と曇りはじめ、ポツポツと地面を冷やし始める。

8.　山本家　・午前7時・内

リビングがバタバタと騒がしく音を立てる。

香織　「奈々ぁ、先行ってるから。ほらこれでお昼と朝ごはん済ませちゃってね。」

香織、机の上に千円札を一枚ポンと置き、統吾の手を引いて仕事に出かける。

奈々雄、住所が書かれたメモ帳を眺める。

「過去回想」　×　×　×

屋上、奈々雄と陸樹が二人でグラウンドを眺める。

奈々雄　「もう放課後だ、サボっちゃったな」

グラウンドには野球部やサッカー部、吹奏楽部などの声や音が入り混じる。

陸樹　「もう関係ないよ。どうせ行く気もなかった。だったら遊び行きたいな」

陸樹、爽やかな笑顔で奈々雄に話しかける。

奈々雄　「どこ行くの」

陸樹　「とっておきの場所があるからここ集合、そうだ。どうせだったら明日も学校休んで行った方が楽しいだろ、昼な！」

「終了」　×　×　×

ニュースキャスタ　「午前十時をお知らせします。天気予報をお伝えします。晴れのち曇り、所により夕方から雨模様です」

奈々雄　「そろそろ」

奈々雄、千円札を雑にポケットにねじ込み、傘を持って外に出る。

9.　喫茶店・午前１１時・内

陸樹、喫茶店の入口にいる奈々雄に手招きする。

陸樹　「ほら、こっちこっち」

奈々雄　「なんでこんな喫茶店で話すんだよ」

陸樹　「まあまあ、とりあえず座ってなんか頼みなよ」

奈々雄、メニュー表から一番安いコーヒーを頼む。

陸樹　「そういえばさ、あの時奈々雄、知りたいことがあるって言ってただろ」

奈々雄　「うん」

陸樹　「何知りたいか言えよ」

奈々雄　「きっと陸樹は分からないとは思うよ」

陸樹　「言ってみないとわからないだろ」

奈々雄　「羨ましいなって思った。友達に囲まれて、先生にお母さんお父さん、みんな陸樹を見てる。それなのにあんなに切羽詰まっていた、そんな理由が」

陸樹　「それだけ？」

店員、陸樹にはクリームメロンソーダ、奈々雄にはアメリカンをゆっくりと置く。

奈々雄と陸樹、軽く会釈する。

奈々雄　「まあ、それだけ」

陸樹　「そっか、俺は期待されるだけじゃなかったんだなぁ。ありがとう」

奈々雄　「え？」

陸樹　「いや、なんでもない」

奈々雄　「そういえばさ、ちょっとこれの写真撮ってもいい？」

陸樹　「いいけど、そのカメラ見たことないな。写真撮るの好きなの？」

奈々雄　「写真撮るのは今日が三回目、このカメラはおじいちゃんからのお下がりなんだけど……」

陸樹　「渋くていいな、それ」

奈々雄と陸樹、ゆっくりと飲みながらくつろぐ。

陸樹　「あのさ、今日このまま行きたいところあるんだけどいいかな」

陸樹と奈々雄、喫茶店を出ていく。

10.　歩道　・午後3時・外

二人の歩いている風景がだんだんと繁華街から住宅街、畑と流れていく。

奈々雄　「どこまで歩くの」

陸樹　「もうそろそろかな」

奈々雄　「何しに行くの」

陸樹　「もうちょっとでわかるって」

スイカ販売ののぼりが風に揺れている。

奈々雄　「でっけぇ」

陸樹　「すいませんこのスイカ一つください」

店員、半分に切った状態で渡す。

陸樹　「ほら、歩いた分の疲労が取れるよ」

奈々雄　「めっちゃうまい！」

陸樹と奈々雄、ベンチでスイカを食べる。

奈々雄、スイカの写真をカメラで撮る。

奈々雄　「結局雨降らなかったな」

陸樹　「まあこんな天気だしな」

奈々雄　「陸樹、傘持ってきてないけど予報見てなかったの」

陸樹　「見る必要なんてないさ」

奈々雄　「まあそっか、まだ気は変わらない？」

陸樹　「ああ。明後日の天の川が見える日、もう決めたんだ。今更揺らいだところで俺の現状は変わらないし変わってくれない」

奈々雄　「そっか。俺も陸樹のこと知れて楽しいよ」

陸樹　「やっぱり最後がおまえで良かった」

11.　山本家・午後7時・内

香織と統吾、テレビを見ながらご飯を食べる。

お笑い芸人１　「つい最近、喧嘩してた親と仲直りしまして……」

お笑い芸人２　「あんまりそんな話聞いてなかったけどいつ喧嘩してたん？」

お笑い芸人１　「これはそう、私が高校三年生の頃……」

お笑い芸人２　「お前それただの反抗期やないか。てか何年反抗期やってんねん……」

テレビからはギャラリーの笑い声が流れる。

香織と統吾、仲良く笑う。

ガチャと扉が開く。

奈々雄　「ただいま」

香織　「どこほっつき歩いてたの、ご飯冷めちゃうから食べちゃいなさい」

奈々雄、手を洗いパックに詰められた唐揚げやサラダをつまむ。

「過去回想」　×　×　×

奈々雄と陸樹、学校の屋上にいる。

陸樹　「いいよ。その代わり俺が死ぬときは手伝ってくれよ」

奈々雄　「いいけど、どうして」

陸樹　「死ぬのが怖いんだ」

奈々雄　「怖いなら辞めたらいい、きっと痛いし辛い、さみしいし苦しいだろ」

陸樹　「でも、今の現状が続いていく方がずっと嫌だ。もう親に、友人に、先生に期待されるのが苦しい。そんな理由じゃ弱いか」

奈々雄　「……」

「終了」

×　×　×

奈々雄　「ねえ、母さん。今生きるのが嫌な時って死んじゃうのが一番楽なのかな」

香織、鬼のような形相で奈々雄を睨む。

香織　「なんかあったの？　死ぬなんて絶対言わないで」

奈々雄　「友達が、辛そうなんだ」

香織　「友達だとしても、絶対に死ぬなんてありえないから」

香織、バンッと箸をおいてリビングから出ていく。

奈々雄　「はぁ」

奈々雄、頭をぐしゃぐしゃにする。

12.　ソフトクリーム屋・午後1時・外

奈々雄と陸樹、ベンチに座りながらソフトクリームを食べる。

奈々雄（M）　「結局今日も学校をさぼった」

奈々雄、神妙な顔をする。

陸樹　「なんかあった？」

奈々雄　「今日は何しに行くんだろうなって」

陸樹　「今日は食べ歩き、クレープにワッフル。あとしめにラーメン」

奈々雄　「……」

×　×　×

クレープやワッフル、パンプキンパイなどをおいしそうに食べる陸樹、それを眺める奈々雄。

段々と時間が過ぎていき、午後五時を過ぎる。

×　×　×

陸樹　「明日だね」

奈々雄　「天の川、きっときれいだよ」

陸樹　「見たことあんのかよ」

奈々雄　「見たことないけど」

陸樹　「どこで見るとか分かる？」

奈々雄　「多分手稲山だよね」

陸樹　「まだちょっと時間あるし下見でもどう？」

奈々雄　「今日はいいかな」

陸樹　「あっそう。……俺、もう少しだけ頑張ってみるよ。お前に励まされたおかげだ、ありがとう」

奈々雄　「よかった」

陸樹　「明日は手稲山、現地集合で」

13.　山本家・午後８時・内

寝静まった山本家。奈々雄一人、テレビをリビングで見る。

ニュースキャスタ　「明日の天気です。北海道全域は晴れの模様です。夕方から見え始める天の川も見ごろです」

奈々雄　「雨降ってくれよ……」

奈々雄、フィルムカメラからフィルムを取り出す。

奈々雄　「はぁ」

14.　手稲山・午後4時・外

陸樹、ドリンク二本を持ちながら立っている。

陸樹　「まだかな」

×　×　×

奈々雄は現れず、時間だけが刻一刻と過ぎていく。

午後六時手前の手稲山には天の川を見ようとして来た多くの観光客や地元民で押し寄せる。

×　×　×

陸樹　「寝坊……なわけないし」

子供　「ねぇお母さん知ってる？天の川には織姫と彦星っていう人がいて。この日だけ、会うことが許されてるんだよ」

母　「へぇ～。良かったね今日見に来れて。織姫と彦星さん、幸せだといいねぇ」

子供　「うん。きっと一年間話せなかったことをいっぱい話してるんだよ」

通りすがりの親子が陸樹の前を通り過ぎる。

「過去回想」

×　×　×

陸樹　「はぁ……スッキリした。最後がお前で良かったよ。ありがとな」

奈々雄　「死ぬ前に教えてくれよ、陸樹のこと」

奈々雄、柵から身を乗り出して陸樹の手を握る。

陸樹　「もういいだろ、おまえには俺の問題は解決できないし、して欲しいとも思ってない」

奈々雄　「陸樹のためなんかじゃない、俺はお前みたいになりたい。許されるならお前になりたい」

陸樹（M）　「あの時も」

奈々雄　「きっと陸樹は分からないとは思うよ」

陸樹　「言ってみないとわからないだろ」

奈々雄　「羨ましいなって思った。友達に囲まれて、先生にお母さんお父さん、みんな陸樹を見てる。それなのにあんなに切羽詰まっていた、そんな理由が」

陸樹　「それだけ？」

陸樹（M）　「あの時だって。奈々雄のおかげで俺は救われてた。でも、あいつ自身は、何も救われてない。」

「終了」

×　×　×

陸樹、ドリンクを投げ捨て走り出す。

陸樹（M）　「あいつの苦しさを聞いてあげてたか、あいつの哀しみを背負ってあげられてたか、あいつはなん

でも自分のせいにして誰にも相談しないで、あいつは……」

陸樹、石につまづきコケる。

陸樹　「っぅ……　くっそ」

陸樹、目を手の甲で拭き走り出す。

陸樹、手稲山から住宅街を通り過ぎ、緑地を横切り、山本家へ着く。

15.　山本家・午後8時・内

ピーンポンピンポーン。

ガチャと扉を開けて奈々雄の部屋に行く。

奈々雄　「……グスッ」

奈々雄、ベッドに座り込み泣く。

陸樹　「よかった」

奈々雄　「なんで来たんだ」

陸樹　「お前が困っているんじゃないかって、お前が苦しんでるんじゃないかって。俺ら友達だから心配なんて当たり前だろ。話してくれよ」

陸樹、奈々雄を抱きしめる。

奈々雄　「……　お前と一緒にいるたびに悲しくなった。苦しくなった。」

陸樹　「ごめん」

奈々雄　「陸樹のせいじゃない。楽しかったんだ、でもそれ以上に俺はお前になんて到底なれやしないと思った。親にも迷惑を掛けられない、友達なんていないし、相談できなかった。いつしかそんな自分が消えてしまえばなんて思って、でも陸樹は前を

向こうとして、そんな人の前に今の俺は立てない」

陸樹　「そんなの関係ないだろ。あの日、あの屋上でお前が俺を止めてくれたから、だから……。そんなこと言わないでくれ」

奈々雄　「ごめん、天の川見れなくて」

陸樹　「また来年、一緒に見に行こう。手稲山まで二人で」

16.　手稲山・午後８時・外

男、フィルムカメラを片手に夜空を眺める。地べたに座り、カシャカシャとカメラを鳴らす。

男が立ち上がろうと腰を上げると、数枚のフィルムがポケットから落ちる。

写真には、スイカやコーヒーなどまばらな風景が映っている。

男――武藤陸樹（19）。

陸樹　「さみぃ……」

空には天の川が広がっている。

奈々雄　「遅くなった、ほら。ホットコーヒー」

陸樹　「ようやくだな」

奈々雄　「ごめん」

陸樹　「謝んなって。そういえば、天の川の話知ってる？」

奈々雄　「織姫と彦星が年に一回だけ会えるんだろ」

陸樹　「その二人を会わせるために天の川の橋になっている鳥がいるんだ」

奈々雄　「へぇ、初めて聞いた」

陸樹　「その鳥の名前はカササギ、北海道では珍しい鳥なんだけど、ここで目撃情報もあるとか」

奈々雄　「俺らをつなぎとめてくれたのももしかしたら」

陸樹　「そんなの関係ないよ。俺らをつなぎとめたのは奈々雄と俺の気持ち、ただそれだけ」

奈々雄　「そっか」

陸樹　「就職はどこ行くの」

奈々雄　「道外、会えなくなるわけじゃないけど、寂しいな」

陸樹　「大丈夫さ、苦しいことを乗り越えたんだ。大人になってお酒飲めるようになったら、昔の話聞かせてくれよ」

奈々雄　「そんなに面白い話なんてないよ」

陸樹　「きっと面白いよ。だからさ、死ぬ前までに教えてくれよ、奈々雄のこと」